

房本デザイン工芸

うちで作るお面は、京都を中心とした民芸品店やお土産店で販売。伏見稻荷では、狐の面の人気が高く、大小合わせると毎年1万個ほど作らなあかんです。十日戎には、えびすさんの面が1000個ほど出るので、一年中、いろいろな面を作り続けています。

うちのお面は、手すき和紙を使っています。和紙よりも立体感という

か細かな表情がでるんですわ。色つけも筆で描きます。生きているような表情は、目と口の描き方が肝心。これだけは、私にしかできない作業です。

和紙工芸面は時代に関係なく、縁起ものとして根強い人気があります。内張り子という技法で和紙張り子面を作っているのは、関西ではうちだけ。全国でも数

件しかないと思います。私は好きなことをやり続けているだけですが、そこに打ち込むだけの情熱と覚悟は今も持ち続けていますよ。

絵づけ担当して
30年

1日につくれて50個

同じように描くよりも
筆の運びのよさを減らして
微妙に表情が
変わります



塗料には、ネオカラーを使用。民芸調の風合いがでるんです。筆は面相筆と大筆を使いますが、筆はすぐ痛んでしまいますね。

縁起もののえびすさんと
大黒さんのお面や
狐、十二支、そのほか招福開運の
お面をつくっています。



面づくり職人 房本 武義さん



型に和紙をはってぬき、色づけ 繊細な表情を浮かべる お面を制作

房本さんの祖父は仏像彫刻師、お父様も仏像を作るかたわら、紙でマネキンを制作。そんな環境にも恵まれ、お面や人形を趣味で作っていたそう。そして、1968年に現在の工房をかまえ、本格的にお面づくりを開始。すべて手作業で紙のお面を作っている。お面づくりは、まずデザインを平面で描き、粘土で立体的にお面をぬく顔の原型を作り、石膏で型どり。その型に手すきの和紙をはって1つひとつ手で抜きます。和紙のお面に胡粉(ごふん)と言って貝の粉から作った白い顔料に、動物の皮のコラーゲンからつくる膠(にかわ)と言う接着剤を混ぜたものを塗布。それを、面相筆という日本画で使用する筆で色づけ。特に、目と口の筆入れはお面に命を吹き込む作業で、房本さんがもっとも精魂込めて行う部分だ。

機械で大量生産されるプラスチック製のお面と比べ、紙で作るお面は時間も手間ひまもかかる作業なので、1日50個作ることができればいいほうだそう。紙ならではの繊細でリアルな表情は、まさに魂がこもっている。



昔ばなしを
テーマにした
作品も多い

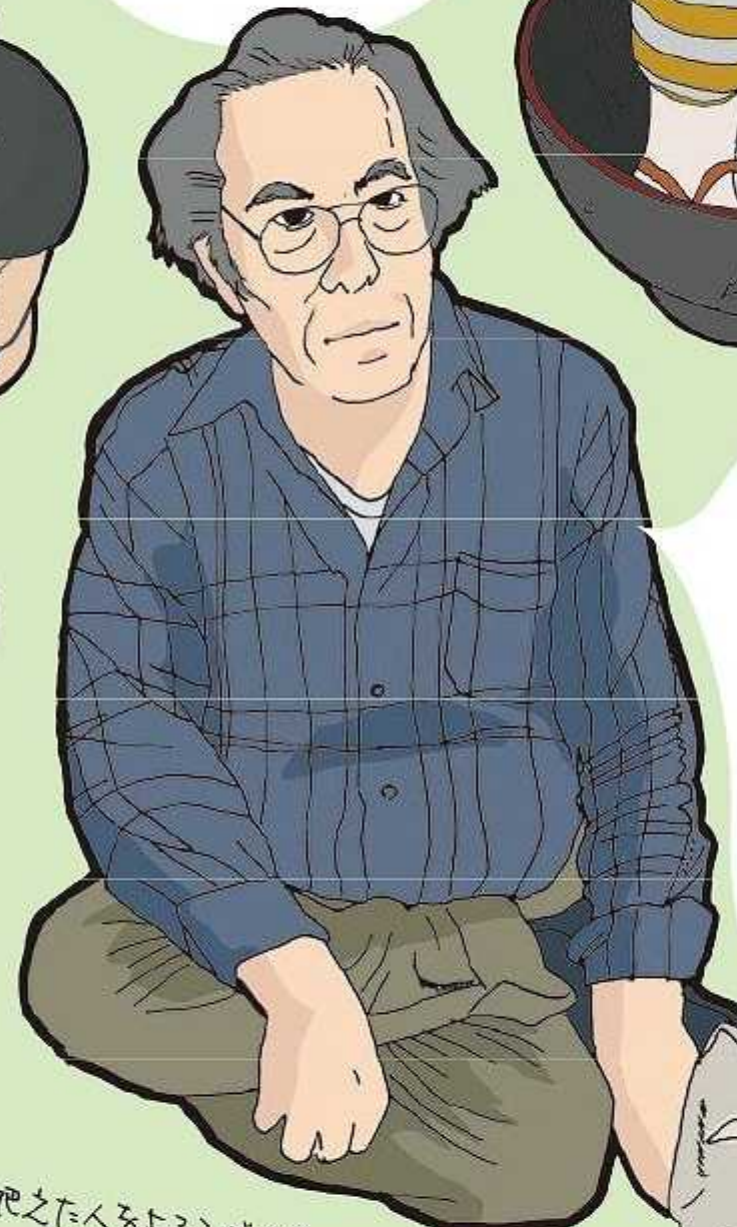


黒いおまき猫は「福猫」として魔除けや幸福の象徴とされ、魔除け厄除けのまじないの神として



日韓交流で韓国に
贈られました

民芸店で
偶然自分の作品を
見かけたときは
嬉しいですよ



内張子といって、石膏型の内側に和紙を張って作っていくのは、シビアな表情やリアルな線も表現できるけれど、難しい技法。きりっとした表情をうちは内張子にこだわっています。

家族の支えで
お面づくりができる

保育士をしていた奥様は、お面づくりはシロウトだったが、今では色づけまでできるように。息子さん夫婦や娘さんも繁忙期には手伝うそうで、家族に支えられてこそ、房本さんの芸術的なお面ができあがる。

我が社の
自慢



目の肥えた人によるこぼせるには、根気強く、精魂こめて作らなかん。それは大変だけど、好きやから続けてこえました。作品に打ち込めるだけの気持ちがないとあきません。粘土で原型を作りますが、作り出したら一気に仕上げないと、途中で置いといたらダメです。昔つくった型も大切な宝。時代に適合ない形が支持されるので、使用する和紙は特別に手芸用で買ったものを使っています。けど、色いものができあがったらうれしくて、気持ち明るくもって続けてきました。

房本デザイン工芸

〒544-0021
大阪市生野区勝山南1-15-5
TEL 06-6731-2166

事業内容/和紙工芸面の制作(民芸品などで販売されている、えびすさんや大黒さん、キツネなどのお面を作る)